



日本文学全集
37

大岡昇平

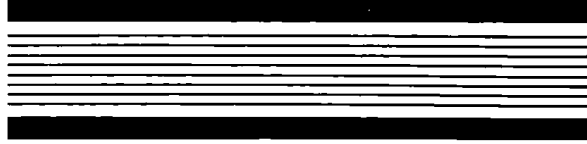


俘虜記・野火・武蔵野夫人・花影・朝の歌
沼津・保成峠・檜原・黒髪・逆杉

河出書房



大岡昇平



カラー版日本文学全集 37

1970©

昭和四十五年四月二十日 初版印刷
昭和四十五年四月三十日 初版発行

定価 七五〇円

著者 大岡昇平

発行者 中島隆之

印刷者 草刈龍平

装幀者 亀倉雄策

本文印刷 中央精版印刷株式会社

口絵印刷 凸版印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

製函 加藤製函印刷株式会社

本文用紙 本州製紙株式会社

クロース 日本クロス工業株式会社

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三丁目六番地

電話・東京(292)三七一一(大代表) 振替・東京一〇八〇二

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

大岡昇平

俘虜記	五
野火	二九
武蔵野夫人	九
花影	一七
朝の歌	二四
沼津	三〇
保成峠	三五

逆 黒 檜

杉 髪 原

.....

.....

.....

注 釈

年 譜

解 説

卷 頭 写 真

色 刷 挿 画

紅 野 敏 郎

三六

高 橋 和 巳

三六

榎 本 良 介

三六

中 本 達 也

三六

向 井 久 万

三六

麻 田 鷹 司

三六

存 傳 記
野 火
武 藏 野 夫 人
花 影
朝 の 歌
黒 髪

大岡昇平



俘虜記

わがころのよくてころさぬにはあらず
歎異鈔*

私は昭和二十年一月二十五日ミンドロ島南方山中において米軍の俘虜となった。

ミンドロ島はルソン島西南に位置し、わが四国の半分ほどの島である。軍事施設として見るべきものなく、これを守るわが兵力は歩兵二箇中隊、海岸の六つの要地に、名ばかりの警備駐屯をおこなうのみである。

私の属する中隊は昭和十九年八月以来、島の南部および西部の警備を担当した。中隊本部は私の属する一箇小隊とともに島の西南端サンホセ*にあり、他の二つの小隊は、それぞれ東南ブラカオ西北バルアオン*にあった。サンホセ、バルアオン、つまり、島の西海岸の全長をおおう約五十里が開けはなたれ、ゲリラが自由に米潜水艦の補給を受けていた。しかし彼らは攻撃して来なかった。

昭和十九年十二月十五日、米軍は艦船約六十隻をもってサンホセに上陸した。われわれはただちに山に入り、南部丘陵地帯を横切つて、三日の後ブラカオ背後の高地で、同地駐屯の小隊と連絡した。米軍はここには上がっていなかったが、小隊はサンホセの砲声を聞き、糧食無線機とともにあらかじめ退避をしていたのである。糧食はまだ豊富であり、まもなくわれわれと合流した付近の水上機基地の海軍部隊、遭難船舶工兵、非戦闘員を合わせ総員約二百名、三カ月以上を支え得るはずであった、明けて一月二十四日米軍の襲撃をうけて四散するまで約四十日、われわれはここに露営した。

米機は終日頭上にあつたが、米軍はただちに追求しては来なかつた。「やつらは怠け者だからこんなどこまでやつて来やしないさ。そつちが来なけりゃこつちだつて行かないや。そのうち戦争も終るだらう」とわれわれの自分の宿舎となるべき小屋がけ作業を指揮しながらある下士官がいったが、これはわれわれの希望のかなり端的な表現であつた。すなわち米軍がこの島をルソン島攻撃の中継基地として選んだことが明白である以上、われわれが山中にじつとしていれば、戦いはわれわれの上を通過して、ここは最後までいわゆる「忘れられた戦線」として残る可能性があつたからである。われわれのような孤立無援の小部隊にいだき得る唯一の希望である。

しかし不幸にしてわれわれはやはり「行かない」わけにはいかなかった。やがてルソン島バタンガス所在の大隊本部から敵偵察の命をうけ、たびたび十数名より成る斥候が組織され、十日あるいは一週間、サンホセ付近の山中に潜伏して歸つた。あるとき彼らは米哨兵に発見され射撃された。

まもなく一箇小隊はサンホセを見はらす高地に移動して分哨となり、毎日彼らが望遠鏡で見た状況を大隊本部に打電した。彼らはしばしば数十隻より成る船団がサンホセ沖を通過北上するのを見、大型爆撃機が多数新設飛行場から離陸するのを見た。かつてわれわれがボートをあやつつて魚を釣つた湾内には、米内火艇が引つかったような水脈を曳いて疾駆していた。

一月にはいり、大隊本部は百五十名から成る斬込隊の派遣を告げて来た。しかし彼らの到着予定日には米軍が東海岸一帯に上陸しており、彼らに乗せた舟艇は以来行方不明であつた。もつとも斬込隊はわれわれのあいだではあまり歓迎すべき客とは考えられていなかった。何となれば彼らの到着はとりもなおさず、われわれの中から若干の決死隊を出し、嚮導せねばならぬことを意味したからである。六十隻をもって上陸した米軍にたいする百五十名の斬込隊の成果について、われわれは何の幻想も持っていなかった。

しかしわれわれはその後も無電命令により幾度かブララカオに出張し、あるいは到着しているかも知れぬ斬込隊を迎えに行つた。われわれは無人の民家をあらし、たまたま家財を取りにきた不運な住民を拉致して帰つた。こうしてわれわれは不本意ながら、だんだん掃蕩される原因を作つていたのである。

こうした絶望的情况にあつても、われわれ兵士は比較的のんきであつた。われわれはことごとくその年召集され、三カ月の教育の後、前線に送られた補充兵で、経験の欠如から事態の重大さがピンと来なかつた。しかしいくら正確に事態を認識したからといって、いつ来るかわからぬ圧倒的に優勢な相手を、毎日氣に病んでいられるものでもな以上、こうした無知はむしろ天が与えた恩恵だつたといふこともできようか。われわれは大部分私のように三十を越していて、目前の事態から強いて早急な結論を求めようとはしなかつた。

それに山中の生活は最初のうちはそんなに悪いものではなかつた。氣候はすでに乾季にはいつて雨も少なく、暑いのは日中、それも日向だけであるから、着のみのままの露営生活には手ごろな陽氣である。糧食もさしあつて不自由なく、分隊ごとに疎開分宿したから軍紀もおのずからゆるんで、兵士をかたくする軍隊の日常の作法から解放した。われわれはキャンプにでも来たような氣持で谷川の水で飯をたき、マニヤンと呼ばれる付近の土民（これは海岸地方に住む一般比島人より色が黒い山人で、戦争に無関心である）と馴れ、赤布、アルミ貨などを与えて、芋、バナナ、煙草などを獲た。われわれはとさどき麓にくんだり、飼主を失つた牛を射つてその肉を食べた。

しかし災厄は意外なほうからやつて来た。マリアである。

ミンドロは比島群島中最も悪性のマリアの発生する島だそうである。しかし予防薬をとつていたためか、サンホセにいるあいだは患者は二、三名を越えなかつたが、山へはいるとき衛生兵がキニーネを忘棄したので、やがて急速に蔓延し、一月二十四日米軍に襲撃されたとき、立つて戦い得る者三十人を出なかつた。最後の半月のあいだには

大体一日三人ずつ死んでいった。

病人はしづかに死んだ。彼らの急激な意氣沮喪はいちじるしく、そののんきな日常と異様な対照を示していた。

中隊長は毎朝各分隊の小屋を見舞つた。彼は小屋に充滿している病人を眺め、だまつて戸口に立ちつくした。

私の分隊長は米軍上陸直後まだ退路のひらいていたあいだに、しゃにむに北上してルソン島に渡らなかつたことにつき、中隊長の決意を非難する口吻をもらした。彼によれば、こんな山の中にいつまでもまごまごしているから、大隊本部からめんどうな偵察の命令をうけ、結局こうして病人がふえて動きがとれなくなつたのである。

下士官のエゴイズムである。しかしこの判断にはルソン島を永久の安全地帯と見なす近視眼的前提がふくまれていた。かつてノモンハンの戦闘を見た中隊長が、比島派遣軍の運命についてかかる樂觀的予測を抱懐し得たはずはない。

彼は幹部候補生あがりの若い中尉で、二十七歳であつたが、無口で陰氣で、三十歳より下には見えなかつた。彼がノモンハンで何をし何を見たか、彼は一度も語らなかつたが、その目その顔には現われていた。私は彼のからだにその僚友の死臭をかぐようにさえ思った。「警備隊は警備地区をもってその墓場と心得ねばならぬ」と彼はいつもいつもいつも言っていたが、私は彼が通り一べんの訓示をおこなつていたとは思わなかつた。

彼は米軍に対してわれわれの現在地をとくに秘匿しようとはしなかつた。サンホセから道案内した土民には、慣習に反して食糧を与え帰らしめた。彼の言動には一種のあきらめがあり、動作はいわば過度に緩慢であつて、とさどき歯のあいだから押しだすように弱く笑つた。犠牲者の笑いである。

彼は幾分すんで死を求めたようである。サンホセ駐屯中おこなつた討伐戦で、彼はつねに先頭に立つて戦い、決して自分を避蔽しなかつた。彼は自分では戦争の要請を至上命令として自分に課することを

許しながら、それを部下に課することについては自己の責任を感ぜずにはいられない、あの心のやさしい指揮者の一人であった。彼らは一般にただ自己の死によつてしか、その部下にたいする要求を正当化する手段を持っていない。

山中で最後に米軍の襲撃をうけたとき、彼は火点観測のため単身前進し、迫撃砲の直撃弾をうけて、一番先に戦死した。おそらく本望だったろう。

一種の共感から私はこの若い将校をひそかに愛していた。私もまた私なりに、彼とはかなり違つた意味においてであつたけれど、自分の確実な死を見つめて生きていたからである。

私はすでに日本の勝利を信じていなかった。私は祖国をこんな絶望的な戦いに引きずりこんだ軍部をにくんでいたが、私がこれまで彼らを阻止すべく何事も暗さなかつた以上、彼らによつて与えられた運命に抗議する権利はないと思われた。一介の無力な市民と、一国の暴力を行使する組織とを対等におくこつた考え方に私はこつけないを感じたが、今無意味な死にかりだされてゆく自己の愚劣をわらわれないためにも、そう考へる必要があつたのである。

しかし夜、関門海峡に投錨した輸送船の甲板から、下のほうを動いてゆく玩具のような連絡船の赤や青の灯を見ながら、奴隸のように死にむかつて積みだされてゆく自分のみじめさが肚にこたえた。

出征する日まで私は「祖国と運命とともにするまで」という観念に安住し、時局便乗の虚言者もむなしく談ずる敗戦主義者も一からげにわらつていたが、いざ輸送船に乗つてしまうと、たんなる「死」がどつかりと私の前に腰をおろして動かないのに閉口した。

私の三十五年の生涯は満足すべきものではなく、別れを告げる人はいり、別れは実際つらかつたが、それは現に私が輸送船上にいるという事実によつて、確実に過ぎさつた。未来には死があるばかりであるが、われわれがそれについて表象し得るものは完全な虚無であり、そこに移るのも、今私がいやおうなく輸送船に乗せられたと同じ推移を

もつてすることができるとならば、私に何の思ひわづらうことがあろう。私はくりかえしこつ自分と言いきかせた。しかし死の観念はたえ付戻つて、生活のあらゆる瞬間に私をおそつた。私はついにいかにも死とは何者でもない、ただ確実な死をひかえて今私が生きている、それが問題なのだといふことを了解した。

死の観念はしかしこつこつよい観念である。比島の原色の朝やけ夕やけ、椰子と火焰樹は私を狂喜させた。いたるところ死の影を見ながら、私はこの植物が動物を圧倒している熱帯の風物を目でむさぼつた。私は死の前にこつした生の氾濫を見せられた運命に感謝した。山へはいつてからの自然には椰子はなく、低地の繁茂に高原性の秩序が取つてかわつたが、それも私にはますます美しく思われた。こつして自然のふところであつたはず増大してゆく快感は、私の最後の時が近づいた確実なしるしであると思われた。

しかしいよいよ退路が遮断され、周囲で僚友がつぎつぎに死んでゆくのをみるにつれ、ふしぎな変化が私のなかで起つた。私は突然私の生還の可能性を信じた。九分九厘確実な死は突然おしのけられ、一脈の空想的な可能性をえがいて、それを追求する気になつた。少なくともそのために万全をつくさないのは無意味と思われた。

明らかにこれは周囲に濃くなつてきた死の影にたいする私の肉体の反作用であつた。こつした異常な状態にあつて、肉体がわれわれをしておこなわしめるものはすこぶる現実的であるが、その考えさすものはつねに荒唐無稽である。

私には一人の仲間があつた。滋野はある漁業会社の重役の息子で、私と同年の、妻子のある男だつたが、彼は銃後の資本家のエゴイズムに愛想をつかし（と彼はいつていた）その手先たらんよりは前線に出て一兵卒として戦うことを夢みた。彼は内地で教育中、前線出動の可能性をわざと軍に影響をもつ父親に知らさず、みずから内地にのこる手段をたち切つていた。彼の夢は前線の情況を見て破れた。彼はわが軍が愚劣に戦つていと判断し、「こんな戦場で死んじやつまらない」

と思つたといつた。

又、残

このことは私にとつて一種の天啓であつた。この死を無理にみずから選んだ死とする倨傲が、一種の自己欺瞞にすぎないことに私は突然思いあつた。こんなへんびな山中でなすところなく愚劣な作戦の犠牲になつて死ぬのは、「つまらない」ただそれだけなのである。

われわれは二人で比島脱出の計画を立てた。その計画とはこうである——いずれわれわれが米軍によつて現在地を追われるのは確實として、何とか敵中をくぐつて西海岸に出る。そして住民の帆船をぶんどり、季節風を利用して島伝いにポルネオにのされる(このさい私が海水浴場でおぼえた帆走術が役立つはずであつた)。私はポルネオも安全とはいえないから、いっそ南支那海をつつ切つて仏印に渡つてはどうかと提案したが、滋野はそれは食糧と航海技術の關係で不可能だから、次善を選ぶほかはあるまいといつた。

帆船が得られなかつたばあい、われわれはふたたび山にこもり、草の根でも食べて休戦を待つのである。われわれは昔読んだ「ロビンソン・クルーソー」の細目を語りあい、土民に木から火をおこす方法を学んでおいた。

この計画は、いかにも空想的であるが、われわれは、その実現の可能性を少しもうたがわなかつた。

われわれはくりかえし計画を検討し、日に三人だれか死んでゆくなかで、墓掘人足のように快活であつた(われわれはじつさい墓穴を掘つた)。われわれのもつとも身近な敵、マリアアにかかつたばあいを考慮し、現在のこつた唯一の對抗法、つまり、あらかじめ体力をたくわえることに全力をあげた。われわれは病人ののこした粥を食べ、土に落ちた飯粒もひろつて食べた。

われわれはこうして、あらゆるばあいにそなえて周到に計画していたにもかかわらず、ただわれわれがマリアアで発熱しているちようどそのとき、米軍がやつて来るばあいに想到していなかった。

二人とも申しあわせたように一月十六日に発熱した。私は毎日四十

度の熱がつづき、二日めに足が立たなくなり、三日めに舌がもつれた。滋野の症状は私ほど重くはなかつたが、熱は三十九度以上出た。

最初の試練が来たのである。私は心に「武器を取れ」を叫んだ。私からは強健ではなかつたが、病にたいしては比較的抵抗力があるのを知つていた。私は細心に自分の症状を観察し、療法を自分で工夫した。熱のためすぐ下痢がはじまつたのを見て、消化器に無益な負担をかけないために(これがそのときの私の考えであつた)いっさい食べないことにした。半月ぐらい食はずにいても、体力を維持するだけのエネルギーを貯えてあると、私は自負していたのである。

衛生兵は山へはいつてから奇妙なマリアア療法を發明していった。つまりマリアア患者は水をのんではいけないといふのである。私はそれまでの盲従の習慣を一擲し、断固として反対した。あらゆる論拠をあげて、禁止の無意味なることを証明した。分隊長は怒つて兵士が私のために水をくむことを禁じた。私は他の分隊の兵士が通るのを待つてひそかに頼み、あるいは自分で十間ばかり離れた泉まではつて行つて水筒に汲んだ。

私は死がマリアア患者を急激におそうのに気がついていた。私はたえず自分のからだの状態を監視し、まだ死につかないのを確かめた。病人が死ぬ前に糞便を失禁するのを見て、苦痛がはげしくなると、わざと戸口まではいだして小便をして見た。

このあいだに一人同じ分隊の兵士が死んだ。死体は私の胸を越えて重ばれた。分隊の全員が病人であつたから、比較的軽い病人が、土葬を手伝わねばならなかつた。長らく発熱して少しくよくなつたと思われた一人の兵士が、死人の装具を一町ばかり上の中隊本部まで返納にやられた。帰つて小屋にはいるとき、私は彼の顔が異様にゆがんでいるのを認めた。翌朝、彼は死んでいた。

この兵士が死んだのは一月二十二日である。私も少し熱がさがり、夕方発病後始めて少量の粥をとつた。その時展望哨が米船三隻のブラカオ湾内に入るのを見たと言へられた。

分隊長は中隊本部へ行き、なかなか帰らなかつた。帰つても不機嫌に横になつたきり何もいわなかつた。われわれは通りすがりの兵士から、ただちに四名の斥候が出たというのを聞いた。

翌朝目がさめて小屋の周囲が何事もなく明るくなつてゐるのを、ふしぎな気持ちで眺めたのをおぼえている。私は漠然とその払曉米軍が来るかなと考へていたのである。その日も一日無事に暮れた。前夜出た斥候は帰らなかつた。私は分隊長に「きよう米軍が来なかつたところを見ると、僕たちは包囲されてるんじゃないでしょうか」といった。彼は「病人のくせになまいきいな」といった。

つぎの日は一月二十四日である。払曉また一組の将校斥候が出た。七時ごろ一人の兵士が帰つて、一行は麓で襲撃され、将校は戦死したと伝へた。

分隊長はまた中隊本部に呼ばれ、すぐ帰つて、病人は非戦闘員とともにサンホセ方面高地の分哨まで退避する、歩ける者は支度しろといつた。そして彼自身も支度をはじめた（彼も少し前から病人と称してゐた）。

私もようやく歩いて便所へ行けるまで回復してゐたが、分哨まで十五キロの道は自信がなかつた。その先またどれだけ歩かなければならぬかしたるものではない。私はついに自分がここで死ななければならぬことを納得した。

分隊長以下十二名中二名が死んで十名である。そのうち私を入れて四名が残つた。滋野は行くつもりらしく支度をはじめた。私も外へ出て、何となく小屋のまわりを歩きながら、彼に改めて「おれは残るよ」といった。

彼も大分よくなつてゐた。彼は私の腋の下へ腕を入れ「大丈夫だ。おれが助けてやるから一しょに行こう」といった。私はふと歩けるところまで彼と一しょに行く気になつた。私は分隊長に決心を変へたことを伝へた。彼はだまつてゐた。

各自押しだまつて支度をした。別れのことばはかわされなかつた。

出発のときになつた。私が皆について歩きだすると、分隊長が振りむいて、しかし私の顔を見ないようにしながら「大岡、残るか」といった。私はとつさに私がいかに一行の足手まといになるべきか、私の状態が職業軍人の目にどううつるかを了解した。私は「残ります」と答え、銃をおろした。

滋野はなぜかこのとき先発して私の見えないところまで歩いてゐた。そのときの状況では彼を呼びかえす気はおこらなかつた。こうして私はこの比島脱出の相棒と、さよならもいわずに別れてしまつたのである。

この退避組は全部で六十名あまりになつたが、二キロばかり行つたところで襲撃され、ちりぢりになつた。米軍はこのときすでに完全にわれわれを包囲してゐたのである。滋野はその晩まで分隊長と一しょにいたが、翌朝落伍してゐたそうである（こゝろいふことを私は後で私と同じ俘虜収容所に来たこの分隊長から聞いたのである。彼は四名の兵士とともに一カ月ばかり山の中をさまよつた後比島人とらえられた。彼はその手に残つてゐた手榴弾を投げなかつた）。

残つた者のとるべき行動については、何の命令も与へられてゐなかつた。とにかく各自靴をはき、脚絆を巻き戦闘準備をして横になつた。

私はこのとき分隊で一番重い病人であつたから残るのは当然として、他の三人が出発した連中とくらべて、とくに悪い状態にあるとは見えなかつたのは意外であつた。

一人は衣川という大正の講壇批評家の息子で会社員であつた。彼はつねづね命令された最小限をおこなうといふすこぶる消極的な勤務ぶりを示し、上官の受けはよくなかつた。衣川は珍しい姓であつたから、私はあるとき彼に「君は衣川先生の親類かい」ときいたが、彼は「親類じゃねえ」と噛んで吐きたすようにいつた。それは「親類じゃねえ、赤の他人だ」とは受けとれない妙な返事だつた。私は「息子だな」と感じたが、その返事が気にいらなかつたから追求しなかつた。

しかしサンホセに米軍が上陸する直前私が最初の発熱をしたとき、彼も足をいためて班内にいたが、飯盒に水をくんで来て、ていねいに私の頭をひやしてくれた。その看護には女のような奇妙なやさしさがあり、彼のふだんの人に馴れない態度とは似合わなかった。私が前の質問をくりかえすと彼はすなおに次男だといひ、問はず語りに彼の父が震災で不慮の死をとげてから後の一家の歴史をこまごまと語った。以来われわれは友人となった。しかし彼は私と滋野の脱出計画を冷笑していた。

彼ははっきりしたマラリアの症状を示さず、仮病じゃないかという者もあった。少なくとも出かけた滋野よりはるかにいい状態にあったことは事実である。彼は口をまげて「行つたつて残つたつて同じことさ」といった。彼は心はやさしいが、幾分自分をそまつにする男だつたようである。

他の一人は土木師であつた。彼はサンホセ駐屯中上官の前でよく働き、しばしば上等兵の勤務をとつた。私は彼を阿諛者としてきらつていたが、山へはいつてもはや序列も昇進も問題でなくなつた後も、依然としてよく働き、すすんで重い物などかついだ。そしておそらくそのため分隊で一番先に病人となつたのである。私はこの年になつても、まだ人を見る目に誤りがあるのをひそかに恥じた。彼は熱はもう下がつていたが、多分体が見かけ以上に弱つていたのであろう。

もう一人はおとなしい北多摩の百姓である。彼は行くとも残るともはつきり意志表示をせず、ただ皆が出かけた後で、見たら彼がそこにいたというにすぎない。彼はべそをかいたような顔をして、脚絆も巻かずに壁に向いて寝てしまつた。

時刻は残留者がだれも時計を持っていなかったもので、はつきりしたことはわからない。私は通りかかる兵士に飯盒に水をくんで来てもらひ、何度もそれを水筒に詰めようと思ひながら、億劫で止めたのをおぼえてゐる。物音はなかつた。兵士もだんだん通らなくなつた。

突然、谷の下のほうから三発のぶい発射音がきこえ、少し間をお

いて中隊本部のある山の上で、三発の澄んだはじけるような音がした。

小銃の音ではなかつた。私はそれまで迫撃砲の音を聞いたことはなかつたが、なぜかこのときそれを迫撃砲とさめてしまつた。弾着を見るための試射の音であると思われた。

皆起きあがつた。表情のない顔だつた。「来たらしい——とにかく上まで行つて見ようか」と私はいつた。皆「うん」と答えて身動きをはじめた。

私は飯盒の水を水筒に移そうとした。手がふるえて水は外へこぼれた。私は「死ぬのには水はいらねえや」とつぶやき、飯盒を遠く投げとばした。

私の友人はしばしば私が何事にも見切りがよすぎると非難したが、私が今日生きて帰つてこんな文章を書いていられるのは、ひたすら、このときこの水をすてたという一事にかかつてゐる。

私はなるべく身がるに身をこしらえて外へ出た。弾入れも一個しかつけなかつた。そのときの私の感じでは、私の生命はその三十発を射ちつくすまでではもたないものである。

他の三人はまだ中でごそごそやつてゐた。私は中隊本部まで一町の坂道をのぼれるかどうか自信がなかつた。私は「先へ行くぜ」と声をかけて歩きだした。

「一しよに行かないのか」と衣川が不服そうにいつた。私は「歩けるかどうかかわかんないから先に行く。多分途中で待つてゐる」と言ひすて、銃を杖に、狭いジグザグの坂道を登りはじめた。これがこの連中の見おさめとなつた。なおも身ごしらえに手間どつてゐた彼らは、一人もこの米軍の砲撃正面となつた谷から出られなかつた。

私はふしぎに歩いて途中休みなしにのぼりきることができた。上ではみんな活発に動いてゐた。三人ぐらいつつ隊伍を組み、緊張した顔をつらねて、無言で左右にすれちがつてゐた。私は稜線を越えたところにある一つの分隊小屋にはいつて腰をおろした。二、三人の病兵が

銃をだき、顔をゆがめて横たわっていた。

とたんに小屋は炸裂音に包まれた。私は反射的に小屋を出て弾の来る方角へ伏せた。今私がのぼってきた谷の方角でおる。炸裂音はつづいた。「前へ出る、前へ出る」という声がきこえた（このとき、私たちの位置から十メートル後方の衛兵所に弾が落ちて、一人の兵士が大腿骨をくだかれたのである）。私ははって前へにじり出た。炸裂音はなお前方ではげしくしていた。私は前進を中止した。「前へ出る」の声はつづいた。

中隊長が出てきた。彼は背負った鉄兜の上から上衣を羽織り、せむしのような恰好をしていた。彼は「にぎやかでいいじゃないか」と笑いながら双眼鏡を持ちさえ、弾の来るほうへ、映画の画面を横切る人のように歩いて消えた。これが私が彼を見た最後である。

二十人ばかりの兵がそこらに伏せていた。私は隣りの兵士と顔を見あわせた。熱病患者らしく青くふくれたその顔も笑っていた。

弾はまた一しきりはげしくなつて依然前方に落ちた。それから止んだ。

「隊長殿がやられた」という声がし、「衛生兵」と呼ぶ声がつづいた（この衛生兵も後で収容所で会ったが、彼は中隊長の死体を見つけたことができなかったという）。

先任軍曹が来て、「病人は谷におりろ」といった。私は今しがた休んだ小屋へ行つて病人をうながした。彼らは私が最初はいったときと同じ姿勢で寝ていた。そしてきこえるのかきこえないのか、身動きもしなかった。

われわれは私がのぼってきた谷とは反対側の谷へ一列になつておりはじめた。病人でない者も皆おりた。私の前には先任軍曹が歩いていて、「隊長殿がやられた」という声が後ろでした。私は私の前を、何の反応もしめさずに動いてゆく軍曹の背中を、ふしぎな生物を見るよるな気持で見つづけた。「軍曹殿、隊長殿がやられたそうですが」と注意したが、軍曹は振りむかず、「そうか——ほんとうかなあ」とい

つて、歩度をゆるめずに歩きつづけた。

谷をおりたところに別の軍曹が腰かけていた。先任軍曹はそばへ行って「隊長殿がやられたっていうんだが、ほんとうかなあ」といった。「ふーん、ほんとかなあ」おうむがえしに相手は答えた。

彼らの会話は聞くにたえなかつた。私がそこを離れようとする「みんなあっちへかたまつて、命令を待つてろ」といって、谷のむこうの空地を指さした。

そこにはすでに三十人ばかりの兵士が集まっていた。病兵が道はたに倒れていた。ある者はうつ伏せに死んだように倒れ、ある者は銃を横に抱いて「く」の字形に寝ていた。右手は弾倉にあてられ、弾を押しこもうとして力をうしなっていた。弾が地上に散らばっていた。私はその弾をこめてやり、兵士のからだを揺すぶったが、彼は目をあかなかつた。

「安全装置したか。暴発するぞ」と通りがかつた兵長が怒つたような声でいった。

空地に集まつた兵士のなかに伍長が一人まじっていた。「命令を待て」という軍曹のことばを伝えると「けっ、命令なんか、待つていられるか。おれがうまく逃がしてやるから、みんな来い」といって一方の道をどんだんのぼりだした。私は機械的に行つた。のぼりはずらかつた。私がずつとおくれて半町ばかりのぼり、一息ついていと、一行はどやどや引きかえして来た。伍長は血走つた目をして「だめだ。こつちも撃つてやがる。あつちから行こう。あつちもだめだつたら、銃座へ立てこもつて、最後の一戦をまじえるまでだ」といいながらすりぬけて行つた。見知らぬ海軍の兵士が私を見て「しっかりしろ」といいすてつづいた。

私はほんやり彼らの後ろを見送っていた。私はここまでのぼるの私の力を使いはたしていた。一しょに行こうか、ついて行けるだろうかと思案しながら、私はそこに腰をおろしてしまつた。

一隊はずんずんおりて横へ切れ、林へ入つてしまつた。それはこの

谷を少し登ってから別の尾根へ取りつき、先で今彼らが引き返して来た道と合する道である。私はその道を知らなかった。

また、一隊の兵士が足ばやに空地を横切り、林に吸いこまれて行った。私はそのなかに、よく私のところへ身上話をしに来た、ある若い兵士の姿を見たように思った。彼もマリアアで寝ていたはずである。その兵士の姿が、私はまたついて行く気を起させた。私は思いきって立ちあがり、持ちて行つた。

空地には倒れた兵士のほかだれもいなかった。林のなかには道はなかった。前方では兵士らの呼びかう声がひびいていた。声はどんどん遠ざかり、やがてつぶやくような音となって止んだ。その遠ざかる速度は私のとうていついて行けない速度である。

私はまた腰をおろした。そして「わかつたよ。もうたくさんだ。わかつたよ」とつぶやいた（こうして一人になってから、私はしじゅう声を出して考えていた。おそらく自分の考えを自分に確かめるためだったろう。「わかつたよ」とは「どうせおれはここで死ぬことにきめたんじゃないか。思ったより歩けたからここまでついて来たものの、どうせ皆と一しょには行けないんだ。わかつたよ」という意味である）。

私は榊せきに似た大木の根もとに身を横たえ、おもむろに腰の手榴弾をはずしてそばへ置いた。今となつては、これが私の唯一の友であり、希望であった。その強烈な爆発力は私を苦痛なくあの世へ送ってくれるはずである。

このとき私がやがてこの道に来る米軍について何も考えなかったのは、かなり奇妙なことである。おそらく私はどうとう自分の最後の時が来たという考えに圧倒されていたのであろう。あるいは漠然と米軍が来るにはまだ間があると思っていたのかもしれない。さつき伍長がこの道の前方に聞いたという銃声を、私自身は聞かなかつたからである。

何の感慨もなかつた。死についてはすでに考えつくされていた。門

司を出てから私の運命はこの一条の線からのがれることはできなかつた。今その最後の一点に来たというにすぎない。私は「まず末期の水を」とつぶやき、水筒をかたむけた。それは空であつた。

私は分隊を出るとき水をすてたのを思いだした。そのとき私は後でゆっくり水を飲むひまがあるとは思つていなかった。また私は早まったのかもしれない。私は苦笑した。すると、急に渴きがひどくなつてきた。

私は今自分が存在するのを止めようとしているとき、一杯の水を飲むか飲まないかは、どっちでもいいことだと自分に言いさせた。その間にも渴きはどんどんひどくなつて行つた。

付近には水はなかつた。そのとき私のいた谷の川は、われわれがここに来たときすでに流れていなかった。そして今は乾季だつたから、ますます干あがつて、にごつた水がここかしこ、小さな水たまりをつくっているだけである。水を飲むにはふたたび中隊本部のある山を越えて、分隊のそばの泉まで帰るほかはない。しかしそのときの私には、そこまで行く力は残っていないと思われた。

私は以前偶然この谷の上流らしいところを渡つたとき、そこに水があつたのを思いだした。その水はたしか黒くなかつた。

私の知っているそこへ行く道もやはりいったん中隊本部までのぼるのである。しかしもしそれが事実この川の上流であるならば、この谷を伝つてゆけば自然そこへ出るはずである。この道は平坦であり、なお私の力に堪えそうである。

私は再び手榴弾を腰につけて立ちあがつた。そして藪をかきわけて水のない川床におりた。

私は前に、今私が生きてるのは分隊小屋を出るとき水をすてたという一事にかかっていると書いた。第一、そのため私だけが一瞬の差で米軍の攻撃正面となつたその谷から出られたのである。第二、そうして水を持っていなかったため、私はこの最初にえらんだ死場所を離れた。もし私がなおしばらくそこにいれば、私は米軍の手によって完